

特別寄稿

訓下・加註

作法集伝授要意 元瑜編(5)

布施淨慧

特別寄稿

第三十七	驗者作法……………	二
第三十八	十五童子法……………	九
第三十九	十五童子供作法……………	一八
第四十	童子經書写供養作法……………	二一
第四十一	童子經……………	二八
第四十二	童子經書写供養略作法……………	三二
第四十三	壽延經護事……………	三五
第四十四	壽延經……………	三七

特 別 寄 稿

〔作法集〕

驗者作法 三十七

内題 驗者作法

阿尾捨行 唐には撰縛行と云う。

先ず病人を加持する時、我が身を本尊の¹性となす。謂く、想え我が身本来清浄にして、世尊の性を具す。又觀ぜよ。自心の日輪の上に、本尊の種子有り。光明遍く照耀して自身本尊となる。又觀ぜよ。羅字有り、と。病人の心月輪の上において、火焰熾然にして病人の罪障疾患を焚焼すと觀じ²畢る。(但し本尊の身となる本尊の印を用う)

契相をもつて五処(額、右肩、左肩、心、喉 各真言一反を誦ず)

又火炎發生の印、法界生の印を用ゆ。真言を誦じて病者の身上に投ぐ。次に本尊の印を作し心に当て、金剛眼をもつて病人を³觀ぜよ。(先ず右方、次に左方、次に上、次に下)是の如く見已つて本尊真言を誦じ、印をもつて左に転ずること三匝、次に右転を三匝、次に印をもつて靈⁴魂を招く。(同印明を用う。已上晝時)若し夜病人を見るは、先ず左方、次に右方、次に下、次に上なり。是の如く見已つて印を転ずること前の如し。又眼に置くの字有り。真言印亦前の如し。

次に行者發願に云く

至心發願 唯願大日 本尊聖者 三部五⁶謁

兩部界会 諸尊聖衆 四大八大 教令轉身

諸大明王 外金剛部 威徳天等 一切三宝

哀愍於我 佛法靈驗 決定現前 於此病者

消除苦患 令得安穩 若有勢神 作惱乱者

我以法施 令離業道 若靈鬼者 我降伏彼

令入正見 以法水味 令得飽滿 我為佛使

作阿尾捨 護法天等 助我威力 同心加護

是以為善 為佛種子 非我所能 是佛法力

次に五大願

次に般若心經

次に座所を改む 嘸俱吒座なり。坐し已つて瞋怒の形をもつて坐の真言を誦ず。

唵^ウ句^ロ盧^ダ吒^ヂ 湿^シ哩^リ瑟^セ底^ヂ 丁を以つて反す 奚^{ケイ} 形をもつ 吒^チ發^{ハツ}吒^チ

次に念珠を持し并せて金剛杵を執り、声を挙げて咒を誦ず（本尊咒）

先ず本尊の名号を称して後、呪を誦じ、吒發吒の字を加う。（若し男を加持せば、杵をもつて右転せよ。若し女を加持せば左転し吒發吒の字を出す時摧破の勢を作す）

次に善惡を問うて後撓遣せよ。（本尊の印を用い左転）しかして後彈指せよ。藥車ミ、莎呬
次に自身護¹⁰身結界のみ。

或る説に云わく。五大尊惣印（外五古印なり）をもつて、慈救咒を誦じて、咒を持して行者阿尾捨加持秘密の咒法を作す。今聖意を蒙つて云わく。夫れ道の所趣を知らずして、妄りに作障の靈鬼を縛せば、後に必らず破損を蒙る。

是の故に自の咒力を恃んで誤つて他を破すること勿れ。この故に解結の時、鬼の為に取らる。或は臨終の時寂靜ならず。佛法は慈悲をもつて本と為す故に。若し顯宗に依つて四弘願を發し、若し密宗に依らば五大願を發してその所誓とす。既に衆生無辺誓願度等と云う。豈一人を愍んで他の類を捨てんや。恣に瞋害惡厭の心を發すは、是れ慈悲に非らず。此の人永く佛道を背くる者なり。是の故に、行者若し救護の請を受けて阿尾捨の法を作さんと欲はば、まさに是の念を作すべし。我宿福に由つて佛子と作り、佛の聖意に隨つて化他をもつて我が所行となす。唯願くは秘密一切の聖衆、我が咒力を助け玉え。然るゆえは、今是の病者、病を除いて安きを得ば、亦靈鬼をして業を除き慈を得せしむ。即ち応呵して云わく。汝執心をして猶惡道に廻るは汝が苦をもつて更に他人を燒す。弥々苦患を増して何の益か有らん。何れの時か脱を得ん。夫れ人を安んずれば亦我れも安し。菩薩は他の苦に代つて自らの樂を増す。汝理に迷えり。我纔に其の端を悟る。大苦の源は他を燒すに依るのみ。我今汝を責む。但し此れ一人の病者を愍んで汝が靈の鬼を厭うに非ず。

然れば則ち我れ佛法の威力をもつて、此の病者をして汝が靈鬼と共に安穩を得、即ち正見に入らしめんとするなり。乃至一切亦復是の如し。行者是の如く誓ひ已つて、先徳の作法に依つて儀則に違わざれ。若し作法せずんば魔衆便りを得ん。是の故に慎しんで法の如くすべし。行者先ず未開の女及び童男を呼んで、隨つて一人を用う。彼をして手を洗い、口を嚔いで内外清淨ならしむ。上¹¹の如く香水を頂に洒ぎて後に、行者彼の五輪清淨の儀を觀じ、印を結び、大日五字真言を誦じ、彼の童の頂を印して堅固ならしめよ。

次に守護者を勧請して童身に招き入れて（四字の明を用う。謂く弱畔鏝斛なり）善惡生死等を説かしむ。しかして後更に本尊明を誦す。先ず病をなす靈鬼を呼んで童身に縛入せよ。若し身に入らば、童は即ち挙動す。若しくは¹²不

実、若しくは¹³実、若しくは魔、若しくは霊その相各の異なり。『蘊摩呼童子經』を視るべし。若し実に移れば病者微く安し。その時に行者印をもって病人を加持して堅固ならしめ已つて後童に対して種々に問訊せよ。

覆護人身真言

唵^ド度^ビ比^ミ迦^{キヤ}耶^ヤ度^ド比^ビ鉢^ハ羅^ラ鉗^ジ縛^バ里^リ寧^ネ莎^イ呵^ワ

守護者及び靈鬼に対して問訊の時は、行者左右の眼に^ムの二字を觀じ置き、日日輪となつて大光明を放ちて、^ム字より火光を放つて彼をして業障の執心を焼かしめ、^ム字より清淨の光を出して彼をして法樂を得せしむ。其の印相は、二手金拳にして各々腰の側に安んず。

真言

唵縛曰羅^二地里^二瑟致^ム

¹⁴病者の死生を知る法

或る口伝に云わく。請使來り迎うる時、右手をもつて頂に挙げて面を掩わば、是れ不死の相なり。左の手をもつて掩わばこれ必死の相なり。若しこの相を見ざれば呪を誦じて出行するに、多く惡獸、惡禽、裸形の人、不善の者に遇わんに必死の相なり。若し好人の類に遇わば不死の相なり。若しこの相を見ずんば、病者の所に往くに、若し左を着け臥さば、必死の相なり。若し右に臥さば不死の相、これ等は皆咒を誦じて其の相を見ると^云

『集經』の八に云わく。病人の家の使及至若しその面西南西北に向うは、この病差えずまた吉を得ず。咒師去りゆくこと莫れ。若し貴人に喚はれ去^ユかざるを得ざれば、自ら護身をなし彼の所に致り、即還れ得て留らず。若し使左手

を挙げて数々面を摩ずらば、呪師去くことなかれ。去かば吉ならず。貴人賊人同じく前法の如し。略抄

本文中朱書付点

1. 性 慈覚の口決に無し
2. 畢 已 口決
3. 観 視 ヨ 口決
4. 先右方…… 口決は龜字
5. 魂 鬼 口決
6. 詛 詛 (部の異体)
7. 護 持 イ 口決
8. 湿 涅 經
9. 若… 口決 龜字
10. 身 口決 無
11. 上 法 イ 口決
12. 不実 実 イ 口決
13. 実 不実 イ 口決
14. 病者…… 已下慈覚の驗者作法に非ず

〔伝授要意〕

驗者作法

此の作法は『¹秘抄』の作法の巻に出る故に、別に伝授に及ばず。但し「次に自身護身の下は『秘抄』に無き故にこれを伝授すべし。

元²按ずるに、今此の集は心覚の『作法集』第一の驗者作法を写す故に、『秘抄』より廣博なり。但し「病者の死生を知る法」の下は無し。彼は別の作法なる故に。

² 蘓摩呼童子經 中 (十三) 阿毘舍 (遍入字)

〔覆護人身真言〕 慈順の仰せに云く。『³最勝心明王經 (十二左)』に云わく。即ち甲冑真言を以つてす。被甲の真言に曰くと此の真言を挙げ。又『⁴毗奈耶經 (九丁)』措摩身体の咒に曰わく。○唵度比々迦^引也度比鉢羅^{合二}入縛^二里你姿縛^{引二合}賀^引

『⁵蘓悉地供養法』(初左)に云わく、被甲の真言大同。但し你を寧に作る。姿縛賀を莎訶に作る。

〔知病者死生法〕 元²按ずるに、此の作法は驗者の作法に非らずと雖、類法の故に此の中に付するなり。已下は心覚の『作法集』第二の四十三条に出す。

〔諸〕の字 請にこれを作るか

⁶ 集經八云等 明本九 (二十五丁) 心覚の集は細字なり。

註1 『秘抄』 この作法は守覚編の『秘抄』作法の中に収められている。従来『秘抄』の巻数については不同を示し、諸流相伝し

註2
『蘓摩訶童子經』
正藏⑮七二八c

註4 『毗奈耶經』 揩摩身体呪

前出の『最勝心明王經』と同真言。

註5 『蘇悉地供養法』 真言に曰く。

唵度比度迦也度比鉢羅支嚩里寧莎訶（正藏⑮六九五a）

註6 『陀羅尼集經』第八 正藏⑮八五八b

〔作法集〕

十五童子法 三十八

護諸童子供

先ず清淨の所に於いて供物等を弁備す。

五穀粥（蘇蜜、香花油を入れる）大土器二坏（之れに盛る）小土器十五坏（これに盛る）洗米 大土器（二坏）小土器十五坏（これに盛る）菓子二坏（小土器）餅二坏（同）弊帛二捧（各に銀錢を挿す）

已上の供物壇上に新しき薦一枚を敷き、其の上に次第にこれを置け

次に行者沐浴清淨にして新しき浄衣を着て入堂、咩字の印等（常の如し）

次に佛前に至って合掌礼佛（大日、釈迦、不動、大梵天、梅檀 乾闥婆王）

次に着座（塗香、浄三業、三部、被甲等）

次に壇を加持す（三古印、乞里等）

次に加持香水

次に加持供物（施無畏の印 帰命也）

次にす字観 次に浄地 次に浄身、次に啓白 次に神分 次に五悔

次に発願

至心発願 大梵天王 梅檀乾闥婆王

十五鬼神 弥迦醜鬼^{ミカシユキ} 弥迦王鬼

騫ケン駄ダ鬼キ 阿波悉魔羅鬼アバシムチキヤ 牟致迦鬼ムチキヤ

摩致迦鬼チキヤ 閻弥迦鬼ミキヤ 迦弥尼鬼キヤミニ

利波拏鬼ニ 富多那鬼フタナ 曼荼難提鬼タイ

舍究尼鬼クニ 健吒波尼鬼ボツキヤ 目佉曼荼鬼

藍波尼 来降於此 所設供物

哀愍納受 護持女大施主 守護嬰兒

增長福寿 恒受快樂 決定円満

殿内安穩 諸人快樂 及以法樂

平等利益

次に五大願 次に三力 次に三部 被甲

地結 牆界

道場觀

想え 心の前に(が)文字有り、七宝莊嚴の宮殿と成る。繒綵(すい) 網等を垂れたり 其の中に二の荷葉座有り 一の座の上

に(す)文字有り (三摩耶形) 大梵天と成る 一の座の上に(す)文字有り (三摩耶形) 栴檀乾闥波王と成る 眷属十五鬼神

圍繞周匝せり (各種子あり、これを觀云ず) 天子并に鬼神の座の科に 新薦一枚これ敷き 其の上に觀ナを作す

次に浄土變 智拳印 真言 唵歩欠

次に勧請 大鈎召印 乾闥婆王これを召請す

大梵天王

次に十五鬼神（右手の空火捻して、風を招いて三度 普集の真言）

庵補保理迦里 里怛他誡多耶

四明 次に闍伽 献座（私に云く、荷葉座か）

塗香印（常の如し）

庵微蘂。羅々々々吽泮吒

華

庵部里惹縛蘭多詣^{ボリジャバランダケイ}び

焼 言（塗の如し）

飲

庵縛曰里尾縛曰藍芸^{バジリビバザランゲイ}び

燈

庵尾縛栗多路者囊吽^{ビバリタロシヤノウンハツタ}発吒

庵蘂嚕婆耶多他蘂多耶

庵蘂嚕々々鉢羅蘂盧々々莎賀

次に飽満印呪 與願印

南摩三曼多勃駄南庵訶利々々葉乞双尾你夜達履比旨々々羅吒々々蘂羅藍々々々訶散難微訶散難弱吽錢斛

次に三帰を授く印呪 八葉印

唵三昧耶薩怛梵

次に讃 金剛合掌

唵比旨々々南無都帝莎賀

次に普供養 三力

普供養大日如来 釈迦世尊 延命菩薩

不動明王 大梵天王 栴檀乾闥婆王

十五鬼神 護持女大施主 守護嬰兒

身体安穩 增長福寿 恒受快樂

決定円満

次礼佛

南無大日如来 南無釈迦牟尼佛

南無延命菩薩 南無不動明王

南無大梵天王 南無栴檀乾闥婆王諸大眷属

次念誦（旋転の明等無し。或はこれを用う）

佛眼 大日 尺迦種智 延命 梵天

結縁 乾闥婆王 心経三卷 一字

次に諸供養（香華等） 次に讃（先の如し）

次に普供養 三力偈

普供養 大日如来 釈迦如来 延命菩薩

不動明王 大梵王 栴檀乾闥婆王

十五鬼神 護持女大施主 守護嬰兒

增長福寿 恒受快樂 決定円満

南無宝勝如来 南無離怖畏如来

南無廣傳身如来 南無甘露王如来

南無妙色身如来 南無多寶如来

南無無量寿如来

次に懺謝偈

所設供具 可咲廉惡 冥道神等

布施歡喜

次に發菩提心印呪 合掌

唵冒地唧多母怛跢娜夜弭

次に廻向偈

應持作神變 隨所利衆生

特 別 寄 稿

利益諸群生 乃至令一切

隨恩願生起

願以此功德等

次に撓遣 彈指三度

真言 曰イ

〔伝授要意〕

十五童子法

印融の云く。此の作法は¹成賢の記なり。密の作法なり。

〔香花油〕 胡麻の油の類なり。都合三種なり。

〔大土器二坏 盛之〕 此れは²不動と乾闥婆とへ備うる供なり。次の小二器は十五童子の供物なり。

³〔施無畏印 歸命せ〕 順逆加持各三度

〔彌迦醜鬼〕 ⁴經（三左）并に次の巻童子經には彌醜迦に作る。故に錯乱の上文字謬るなり。

〔騫駄鬼〕 ^ヂ經并に『童子經』「駄」を「陀」に作る。一本は「陀」に作る。

〔利波尼鬼〕 『經』は「尼^ヂ」を「坻^チ」に、『童子經』は「泥」に作る。

〔曼荼……〕 『經』并に『童子經』には、「荼」を「多」に作る。一本も亦「多」に作る。

〔健吒波尼〕 『經』には「尼尼鬼」に作り、『童經』は今と同じ 一本今と同じ。

19
七四一
c
黎婆
坻

①9
七四三
a

有_レ字 『薄』⁵二重には_レ字に作る。恐くは是れ_レ字ならん。梵天の種子の故に

里恒 里の字の上「他」一字を脱す。

有_レ字 『秘抄』_々字

塗香印 如常 真言は『⁷蘊悉地供養法』下、金剛部の五供養の明なり。『諸要抄』琰魔の下にこれを出す。

⁸藥 『儀軌』は「薩」に作る。今本移誤なり。『諸要抄』十三、琰魔の下「薩」に作る故に。

⁹唵縛曰里尾 本尾を「尼」に作る。『諸尊要抄』今と同じく「尾」に作る。

¹⁰唵蘊嚩婆耶等 此の真言は『焰羅王供行法次第』（七右）に云わく、甘口の真言と云うなり 又云わく。是等の真

言は供物をして微妙の味ならしむると文り。

次飽満印咒 本説いまだ考せず。

無施転明等或用之 旋轉の明は正念誦に在る故に道理無きなり。然れども旋轉明の功力に依るは一反千反となる故にこれを用う。亦可なりと云うなり。

南無多宝如来 南無無量寿如来 洞泉和上の云わく。多宝とは宝勝如来、無量寿は甘露王如来なり。今五如来の外

に此の二佛を出す由緒不分明なり。カ月の仰せに云わく。『¹¹瑜伽集要焰口施食儀（不空訳）』に七如来有り。大同

小異なり。彼の儀軌に云わく。宝勝如来 離怖畏如来 廣博身如来 妙色身如来 多宝如来 阿弥陀如来 無間廣

大威德自在光明如来。

¹²次懺謝偈 『琰羅王行法次第』に云わく。今日某甲 所設供具 多不如法 可咲龜惡 惱乱一切 冥宦冥道 檀吉

爾衆○布施歡喜 今は要を取るか。

特 別 寄 稿

真言 曰

さびふしむなり

註1 成賢の記 印融の『口決』にこの作法について次の記述がある。

童子經大谷薄事 是れは大谷の覚俊の説なり。是れを一帖の次第と為し玉うは成賢の記なり。

この法は『護諸童子陀羅尼經』（菩提留支訳、正藏¹⁹七四一以下所収）により、童子の怖畏疾病を除く為の法である。

註2 不動と乾闥婆 この作法の本尊 乾闥婆は四臂不動の化身

註3 傍註 入堂咩字印等 入道場已前の作法 金剛界の次第に「即ち堂内に入るに已に~~を~~字三遍を誦す。諸の障者を辟除すべし」

等と云う。是れなり。○至仏前とは壇前普札なり。次の淨身「ソハハムバ シュダサラバタラマク」印蓮合なり。

註4 經、童子經 經は本作法の本儀の『仏説護諸童子陀羅尼經』菩提留支訳。童子經は『童子經念誦法』善無畏訳。以下の鬼名

の表記について元瑜が考究した結果が示されている。いずれも大正藏經¹⁹七四一cより七四三aに散見する異字である。

本經に示す十五恐怖鬼神は次の如くである。

名		形相	
第一	彌伽迦	牛	眼睛廻転
第二	彌迦王	師子	数々呕吐
第三	騫陀	鳩魔羅天	両肩動
第四	阿波悉魔羅	野狐	口中沫出
第五	牟致迦	獼猴	把捲不展

特 別 寄 稿

第六 魔致迦 羅刹女 自齧其舌

第七 閻彌迦 馬 熹啼喜笑

第八 迦彌尼 婦女 樂著女人

第九 黎婆坻 狗 見種々雜相

第十 富多那 猪 驚怖啼哭

第十一 曼多難提 猫兒 熹啼喜笑

第十二 舍究尼 鳥 不肯飲乳

第十三 乾吒婆尼尼 鳩 咽喉声塞

第十四 目佉曼荼 獺狐 熱病下痢

第十五 藍婆 蛇 数々噫噦

(以上 正藏¹⁹七四一c—七四二a)

註5 二重 傍註朱書にて初重 本文中に見当らず、更に檢ずべし。

註6 『秘抄』第十七卷「十五童子作法」(正藏⁷⁸五七六b)

註7 『蕪悉地供養法』卷下 金剛部奉塗香真言に曰く。唵微薩羅^{微イ}○薩羅 斜泮吒(正藏¹⁸七〇一c)

『諸要抄』第十三 琰魔王供次第

真言に曰く。唵微薩羅々々々娑縛賀(正藏⁷⁸三二八c)

註8 前註7参照

註9 飲食真言中「縛曰藍芸」とあるが、『諸尊要抄』には「芸」字無し。(正藏⁷⁸三二八c)但し『蕪悉地供養法』にはあり。(正藏¹⁸七〇二b)

- 稿 註10 傍註（朱書） 此の真言行法次第と相違す。糺すべし。ナウマクソロハヤタタギヤタヤ怛ニヤタ唵ソロソロハラソロ
寄 註11 『瑜伽集要焰口施食儀』に七如來の名目を出す。（正藏②四七八—四七九）
別 註12 懺謝偈
特 經本文に出す偈文。但し「檀吉爾衆」の次に、「冥道唯願 今許唯願 慈悲」の十字がある。（正藏②三七六a）

〔作法集〕

十五童子供作法 三十九

壇上に^サ字あり 反じて宮殿となる 其の中に亦^サ字あり 反じて荷葉座となる 座の上に^ス字あり 反じて苾
となる 苾篋反じて栴檀乾闥婆王となる 衣服嚴麗身に甲冑を着す 左の手は左の膝を押し 右の手に三戟鉞を持す
前後左右に十五鬼神及び衆多の眷屬あり 前後圍繞せり
是の如く觀じ了り七処を加持す

乾闥婆王印

内縛して二無名を立て着くこと勿れ 真言に曰く

婦命尾戌駄薩婆羅縛係^{ビシユダソハラバケイニ}儻娑婆賀

羅刹衆印 金剛合掌 真言に曰く

婦命落乞叉細毘葉娑婆賀^{アラキシヤセイビヤヤ}

諸藥双印

外縛して二無名を立て合わす 二頭共に立て相鉤す 着くこと勿れ 真言に曰く

婦命藥^ヤ乞^{キン}叉^ン濕^ン縛^バ羅^ラ婆^ハ婆^ハ賀

礼佛（不動 梅檀乾闥婆王 十五童子 これを礼すべし）

散念誦（仏眼 大日 尺迦 光明 不動 大梵天 乾闥王 童子經 結綿呪 羅刹 藥叉 大 一 法施

後供養等

童子經書写供養の時 散念誦の後読經

次に真言を誦じて結線

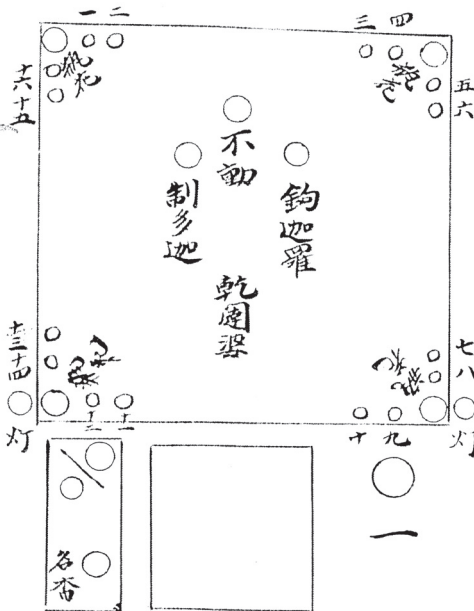
次に後供養

次に封経畢

壇 図

今一杯余るは十五童子惣眷属にこれを供ずべし

壇圖



今一杯餘十五童子惣眷属可供之

特 別 寄 稿

〔伝授要意〕

¹十五童子供作法

此の次第は『秘抄』より別帖せられたるなり。是れまた秘密の作法なり 前の次第と見合せ行すべきなり

〔座上有²文字〕 次上の次第は種子³文字、その異知ぬべし 但し前の本は誤つて⁴に作るか考うべし 次の書写供養も⁵に作る故に。

²苾篋 慈順の仰に云わく。苾の字 字書に見えず。元薺篋に作る。『順和名鈔』四^(二十)に云わく。篋篋俗にて比千利岐。此れは乾闥婆王の三形なり。

〔乾闥婆王印言〕 『青龍軌』下^(十七)

〔羅刹衆印〕 同^(九)

〔諸藥刃印言〕 同^(十四) 但し内縛という。

元⁶按ずるに、此の乾闥婆王は『青軌』には帝釈の眷属と為る意か。彼の乾闥婆王は天帝の樂神なる故に、此の真言の句義も清浄の音声に約す。然るを今梅檀乾闥婆王の印言と為ることは、同体と為る意ならんか。尚尋ぬべし。

〔散念誦〕 〔光明〕とは光明真言なり。後供養○次封経畢りまでの六行『秘抄』になし。

〔壇図〕 〔不動〕は乾闥婆王の本地身なり。是の故に婆王の裏にこれを置くなり。

〔今一杯餘等〕 壇上の十六の印なれば、惣じて眷属に供ずる料なり。十五の外なる故に。

註 1 十五童子供養作法

『護諸童子陀羅尼經』、菩提流支訳 一卷（正蔵⑬七四一以下所収）に依り、童子の怖畏疾病を除く為に修す。『薄』初重卷三（正蔵⑦六三〇以下所収）『秘抄』第十七（正蔵⑦五七六）に出すが、この作法集の法は『秘抄』よりの別帖である。

註2 笈築 現代の字書を引いても「笈」は見当らない。笈築と表現するのが妥当。雅楽の管楽器。主要旋律が奏される。乾闥婆王の三摩耶形。その理由について、元瑜の推論が次下にある。

註3 『青龍軌』 印は「内縛水輪を申ふ」真言は梵天真言の次に出す。（正蔵⑬一六三a・b）

〔作法集〕

童子經書写供養作法 四十

先支度

注進童子經書写供養支度事

合

五色系（各三尺五寸） 名香（沈 白檀） 壇一面（三尺二寸） 燈台（二本） 脇机一前 半畳一枚 薦一枚 米一石
油二升 五穀（各一升） 色紙三枚 硯一面 墨一挺 筆一管 小刀（二柄） 折敷二枚 淨衣一領

右註進件の如し

年 月 日

相応（白月八日 十五日 若くは他の吉日） 『七卷抄』に云わく、白黒月八日十五日_云

晨朝に華水を酌で則ち加持（除苦の明） 供料等に用う。次に手を洗い口を嗽ぎ、法衣を整え三部護身等。次に東

特 別 寄 稿

方に向つて立ち梅檀乾闥婆号を唱うること百反。次に十五鬼の名を唱う各七遍

次に小兒の生氣の方の泉流水（或は井）を汲んで硯水となす。（未明これを取る）硯に水を入れて加持す（除苦の明）小兒の生氣の方の桑木の東へ差したる枝を取り硯の上に置いてこれを用う。（或る説に云わく。細に刻み硯の水に入るべし^云）一歳の正氣の方は東方なり。或る説に云わく。墨再び磨らず、筆再び取るべからず。一座に取りて之れを

書す^云

次に筆を取り^まを誦じ加持す。（常の如し或はこれを用いず）次に經を写す。或は白米一斗の上にこれを置いて書写す。經を写す間焼香一杯名香を焼き煙を絶えず、食前に書写し了る。料紙の長け（二寸許に切るべし云々、或は二寸三分）小兒を坐さしめ（乳母に抱かしむ^云）但し母に八斎戒を受持せしむ^云 已上或る説。私に云わく。今の母とは生母か。經文を見るべし）作壇（方円大小宜に隨え。）

壇図（洗米十六杯の内 大一小十五杯）

行法次第

着座普礼 塗香 三密觀 淨三業 三部 被甲 洒淨（壇上の供具等、小兒等に洒ぐ^云）加持供物（小三古印 枳里^{ミミ言}）^{ミミ言}字觀 淨地 觀佛 金剛起 普礼 表白 題名 發願 五大願 讀經 積經

今將に此の經を釈し奉らんとするに、大意釈名 入文判釈の三意在るべし。初に大意は教主釈迦牟尼善逝 機根の淺深に逗つて權実の教門を説き玉う。一切衆生を利益安樂せんが為なり。然るに此の經は、佛初め正覺を成し玉う時に一の梵天王有り。南円浮提の一切の嬰孩小兒を守護せん為に 十五鬼神の名号を挙げて乃至結線の神呪を説いて、諸の女人所生の男女して保命長寿安穩にして恙無からしめ、世尊又これを印可して重ねて神呪を説いて諸の童子をし

て恐怖を離れ、安穩保寿を得せしむ。此の經の大意なり。次に題目を釈せば、佛とは能化の教主、即ち自覺々他覺行円満の義なり。説とは所説の法門是れ今の修多羅なり。護諸童子とは、諸の童子小兒を護ると説く故に以って名となす。陀羅尼とは遮惡持善の義なり。呪は軍中の密号なり。若し呪に順ぜられるものは、頭を七分に破せん。若し呪に順ずるあれば身に九横を離る。經とは聖教の都名なり。故に佛説護諸童子陀羅尼經と云う。第三に入文判釈せば大いに分つて三となす。爾時如來と云うより歸命三宝等の偈に至るまでを序分と爲す。世尊諸如來等より以下は是れ正宗分なり。時此梵天等より以下は流通分なり。細々の文段 重々の起盡具さには經文の如し。

次神分 祈願 五悔 發願 乾闥婆王 十五鬼神 大金剛輪

道場觀（『秘抄』に依らば、先ず釈迦牟尼を觀すべきか）

壇上に^レ乳字あり 變じて宮殿となる 其の中に亦^レ乳字あり 變じて荷葉座となる 座の上に^レ乳字あり 變じて筆筭となる 筆筭變じて栴檀乾闥婆王となる 衣服嚴麗にして身に甲冑を着け 左手左の膝を押し 右手三戟の鉞を持す 前後左右に十五鬼神及び衆多の眷屬あり 恭敬圍繞せり

是の如く觀じ已つて七処を加持す（常の如し）

大虚空藏 小金剛輪 送車輅 請車輅 召請（大鈎召印言 異説これを出す）四明 拍掌 闕伽 荷葉座 五供（理供・事供）讚（唵比旨々々南謨蘇都帝^{サハ}）又の説延命讚を用う 普供養三万 小祈願（哀愍所獻 除病延命）

礼佛

南無摩訶毘盧遮那佛

南無釈迦牟尼佛

特 別 寄 稿

南無大梵天王

南無栴檀大鬼神王

南無一切三宝

印言等（先大日印言 次釈迦印言）

梵天印（右手を拳に作り腰に安ず。左の手五指相着てこれを立つ 少し屈して拳げること肩を過ぎず。真言に曰わく。

婦命ヲ我ヲ我ヲ

乾闥婆王印（内縛して水輪を申べて合すること勿れ 真言に云わく）

婦命ヲ我ヲ我ヲ我ヲ我ヲ

羅刹王印（右掌を仰けて少し屈して心に当てる。左手を刀印に作して左の腰に安ず 真言に曰わく）

婦命ヲ我ヲ我ヲ我ヲ我ヲ

『秘抄』に云わく。羅刹衆云（然らば印明替るべしか。云く印は金合明に曰わく）

婦命ヲ我ヲ我ヲ我ヲ

諸藥刃印（外縛して水を立て合わせ 風を屈して鈎の如くせよ 真言に曰わく）

婦命ヲ我ヲ我ヲ我ヲ

散念誦（仏眼二十一反 大日 釈迦 光明

大梵 已上百反

但し用否任意 羅刹 夜叉 已上百反

金剛輪 七反 一字 百反

法施（先密 次顯） 後供（理供・事供）

讀 普供養 三力 祈願 礼佛（前の如し）

廻向 普賢行願 撓遣（右手をもつて彈指 ミミズミズミ）

三部 被甲等 次結線（行法以後か 若しくは散念誦の時か 不審_云）

五色絲（長六尺許り）念珠を取り五色の糸等經の中の後真言を以つて加持せよ 五色糸（二十一反 或はこれを用いず）真言に曰わく

多姪他菩提_ミ 菟摩帝菩提_ミ 摩隸或刃夜 婆舍利 婆多弥 婆羅陀 頭隸_ミ 婆藹多頭隸舍摩賦 収隸収隸求隸
 婆藹帝 収藍舍弥帝 盤締婆訶賦 祇摩賦陀婆賦蘇婆忌 賦婆賦羅蘇婆忌

次に經の初めの真言をもつて結線百八遍（或二十一反）

誦ずる毎に一結 經の片端をもつて乳母に取らしめ 百八反結び了る 種々に祈誓す 真言に曰く

多姪他 アキヤラキヤネ 那伽_ミ 寧 婆漏隸 祇隸伽婆隸 婆隸不隸羅収隸修羅倅 遮羅倅 婆陀尼 婆羅訶 胃利沙尼
 那尼易弥那易蘇婆賀

次大鬼王の名号を唱う。一結（或はこれを用いず）

次に十五鬼王の名号を呼んで十五結（各一結一誦、汝今疾去 行速如風 致於四方の句を加う） 或説六字五縛の咒

を以つて結線_云

真言に曰く

特 別 寄 稿

チグイリチリシュリマトラギセンダンリランヤラヤソワカ
 知醯利知利収利摩登耨檀利羅叉羅叉羅耶悉婆賀

次封経（口伝を聞くべし）

経の上を封じて又裏んで送るべし（封秘藏の故なり）

或る説には芥子を取り 経真言を以って加持して母に載かせ経を授け、次に諸の供物を取り聚め、桶に入れて小兒生氣養者の方に穴を掘り、深くこれを埋めるべし。鳥犬に敢すべからず。但し天一大白の方を避くべし^云

〔伝授要意〕

童子経書写供養作法

1 童子経 元魏菩提留又訳 六帋 録外十五経内

2 七巻抄 成就院寛助僧正作 『別行抄』を亦『七巻抄』と名づく。

為硯水（未明取之 未明は寅の刻なり。心覚『作法集』一に云わく。兒生氣の方の水 寅尅汲ましめ硯水となす。

或説云細刻可入硯水 心覚の云わく「東桑東差したる枝を切つて硯水に加う^云」此の説に当る。師の云わく。或

説可なり。

或説云墨再不磨等 此れは一念に書写するべき故にこの指南に及ぶ。遅々すれば雑念起する故に。

次取筆等 此の前に墨を取り、独古の如くこれを持ち 枳里ミミ二十一反、次に筆を取る。

可見経文 4 経（五左）に云わく。此諸女等子息を求めんと欲し〇八戒を受持す。

頭破七分 とは『法華』（陀羅尼品）に云わく。若し我が咒に順ぜず悩乱して説法せば、頭を七分に破作し、阿梨樹

枝の如し（^上）『文句』十の二（四十右）に云わく。阿梨樹枝は他に随い、法爾として破して七片となる

身離九横 慈順の仰せに云わく。經に文無く七分に○する故に九横という。九横に異説あり。『藥師經』等『要覽』中（十九右）『九横經』に云々。

依秘抄 慈順の仰せに云わく。『秘抄』を検ずるに文無し。

⁵用延命讚 奄縛曰羅細等。

ずぬ 明本並びに『秘抄』、前の十五童子供共に第六縛係に作る故に、今の本恐くは写手の者の誤りなり。

諸藥叉印 『秘抄』裏書に云わく、外縛二無名立て合わせ、二頭共に立て相鉤して着くこと勿れ。

法施 （先ず密 次に頭）密とは「心經」「尊勝陀羅尼等。頭とは「時我偈」「劫火洞然」の偈等。

普賢行願 五悔のことなり。然れども懺悔隨喜の一段常の如く唱うべきなり。

次結線 注に二説あり。両方俱に用ゆ。其の中行法已後結線するべきなり。

真言曰 明本に□するに、初めの真言は聊か異りあり。後の真言互に出没あり。尚異本を考うのみ。『秘抄』に云わく、初の呪を鬼神遠行の大呪と名づくと。

或説以六字五縛呪結線 此れは『六字經』の時の事なり。今は用いず。

知醯利等 慈順の仰せに云わく、此の呪⁶二本の經に俱にあり。但し檀を陀に作る縛賊虎狼等という故に、五縛呪というか。

⁷封悉藏故 悉は秘の写し誤り。

可避天一大伯之方 伯の字白に作るべし。印融の云わく、天一神は曆にこれあり。帝白は一夜メグリなり。一日は

稿 寄 別 特

東、二日は辰巳、三日は南方、是如く廻るなり。常の日廻りの神なり。

註1 童子經 具名、佛説護諸童子陀羅尼經（正藏¹⁹七四一以下所収）

註2 七卷抄 第六童子經法冒頭の文（正藏⁷⁸一七二b）

註3 傍註 『印融抄』に『金薄抄』を引いて云わく、惣じて靈水に桑を入れるは相応物なり。

『金薄抄』一卷は、憲深^{（吉野）}口聖憲記、薄二重の諸尊法の口決書（吉野金峯山と薄草子を合字し書名となすと）同書に「問う桑を水に入れる事如何」に対する答説の部分。

註4 『經』『童子陀羅尼經』（正藏¹⁹七四二b）に出す文の要文のみ。

註5 傍註 大日印言 智拳印 マキイマキ 釈迦 智吉祥印 ヤギ

註6 二本の經 傍註 十五經 六字神呪經十三左 二十一右に出す。

註7 用語の封悉藏故の訓点を示し、「封ずるは秘藏する故なり」と読むと。

〔作法集〕 四十一

佛説護諸童子陀羅尼經

〔作法集〕

童子經 四十一

童子經 醍醐大谷阿闍梨記

五色線一筋 長五尺計り 大いさ念珠線の如し。洗米（十七坏）菓子（十七坏）灯明（二坏）闍伽一揃 生氣方の水に桑木の東へ指したる枝を尅さみ入れる。薄様の紙高け二寸計りに切つて、清浄の墨筆にて書写すべし。東に向つて経を書く。次に三礼、次に如来唄 次に表白 次に神分 次に発願

至心発願 書写ミミ 所生ミミ 天衆ミミ

倍增ミミ 無辺ミミ 決定ミミ 及以ミミ

平等ミミ

次に四弘 次に経題名 次に読経 訓読

次に梵天より始め、乾闥婆十五童子 一々これ供ず 普供養印言

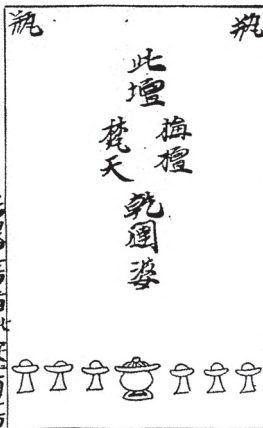
次五縛呪をもつて線一百八結ぶ。結線の真言

多姪他 阿佉羅 佉寧那 伽々寧 姿漏𩇑 祇𩇑婆𩇑 不𩇑羅収称 修羅倅 避羅倅 婆陀尼 波羅訶胃利沙

尼 那尼易弭那易 蘓婆訶

次廻向

师云わく。供物等をもつて施主の生氣の方に埋む。然る後五色の糸をもつて経を封じ、施主の方に送る。



若男書者此定可書也

二天十五童子念咒
坏也

稿 寄 別 特

佛説護諸童子陀羅尼

爾時如來 初めて正覺を成じ下う 一大梵天王有り 佛所に來詣して佛足を敬礼して而も是の言を作す

南無佛陀耶 南無達磨耶 南無僧伽耶

我れ兩足尊を礼し上る 照世の大法王闍浮提に在して 最初に神呪を説いて彌醯迦王 弥迦 王騫陀 阿波悉魔羅

牟致迦 魔致迦 闍弥迦 々弥尼 婆波泥 富多那 曼多難提舍究尼 捷吒波尼 目佉曼荼 藍波

南無佛陀 この呪を成就して諸の童子を護り 惡鬼神の為に燒害せられず 一切の恐怖悉く皆遠離す 娑婆訶時に諸

の天王此の呪を聞き已つて歡喜奉行す 護諸童子經

淨衣白色 線は五色

〔伝授要意〕

童子經 1 醍醐大谷阿闍梨の記

奥に2略經あり。酉酉にはこれを用う。此の作法は未明に書寫し了る故に。廣經便り無ければ祖師略し玉うなり。此

の略經は心覺より伝來すと云。
云

〔發願〕 倍增ミミ 倍增ミミ 私に按ずるに二度これを唱うる故に倍增等と云う。倍增法樂培増威光か

〔次以五縛咒〕 次に出す所の咒は童子經の初めの呪なり

〔一天十五童子合十七坏也〕 此の説は眷属諸鬼神に供することこれ無きか

同經 菩提流支記

慈順僧正の校訂に云わく、大唐菩提流志『貞元録』第十四を検するに、五十三部の中にこの經を載すること無し。『貞元録』九（十七右）元魏菩提留支所訳の中にこれを載す。明本の經に云わく、元魏三藏法師菩提留支訳。今の本の訳号は後人安ずる所か。不審

即時説偈言 已上は長行なれども、五字一句に書するなり。

以此形相令諸小兒皆生驚畏 御本此の下に図あり。今は別に図す。今の牛獅子等の図は本形なり。

我今當復○怖畏之相 此の下イ本に図あり。此れは人形の貌なり。これ万タラに図する時の用なり。

註1 大谷阿闍梨 覺俊（一〇三〇—八〇）

仁海の資覺源に隨い入坦。天性陰德を歛び世を遁れて大谷の持法院に住す（日本密教人物事典、柴田賢龍著 上巻41）覺俊の著作中、胎藏道場觀は「大谷道場觀」として有名、今日でも用いられている。

註2 奥に略経『作法集』本項壇図の後に付せられている経文を指す。然らば広経は如何というに『作法集』本文第四十一を分けて、この大谷記の前に『佛説護諸童子陀羅尼呪經』の全文が記載されてある。これが本経（原経）である。本稿ではこれを割愛したが、大正藏經十九卷七四一頁以下に収録されている。そちらを披見して頂きたい。今兩經を檢分するに記述の上でその差がある。成賢所見の經と、大正藏經所収の經の違いに依るものに起因する。また今依用している智山書庫所藏『作法集』の當所を見るに、經頭部の五字偈文の中、三行目までは書き移されているが、四行目の「最初說神呪」以下偈最終偈の「頭佛聽我說」に至る二十七偈文と、次の「第一名弥勒迦」までが脱落している。その他教箇の差違、書き誤りがあるが、ほとん同一と見受けた。

最尾に

「大師次第」に云わく。訓に童子經一遍を読む。小芥子を取り導師頂上に捧げ、拝後壇上に置く。

大御室御伝に云わく。後夜明星出る時これを修す^云とある。

〔作法集〕 四十二

童子經書写供養略作法

月の八日若くは十五日、若くは他の吉日を以って書写供養してこれを持たしむ。(裏書に云わく。此の法一座にこれを^行す)

師説に云わく。児生氣方の水、寅時にこれを汲んで、硯水並びに關伽水となす。又東方の桑の木の東の枝を切り、硯水に入れる。次に東方に向つて、「南無稱檀乾達婆王」と唱う。(一百反。裡書に云わく。八部衆の内大海に住する鬼王なり。具名經文の如し)

次に十五鬼神の名号を唱う(各百反)

次に新しき淨硯筆をもつて經を書写し奉る。

去垢の明をもつて二十一遍筆硯を加持し、書写の間名香を焼いてこれを断ぜず。又子母は洗浴して八齋戒を受けしめる。書写了つてこれを供養す。

供養法(裏書に云わく。八齋戒を授くる事 若し檀越の所に往き、若しくは彼の母來る時の義なり)

先ず三礼 如來唄 表白 經題 發願 四弘誡經一遍 結線(五色糸七尺許り) 神分 祈願 六種廻向
次に經を封じてこれを送る。(裡書に云わく。即ち児の頸に懸けて守となるなり)

結線作法

先ず十五結（十五鬼神）

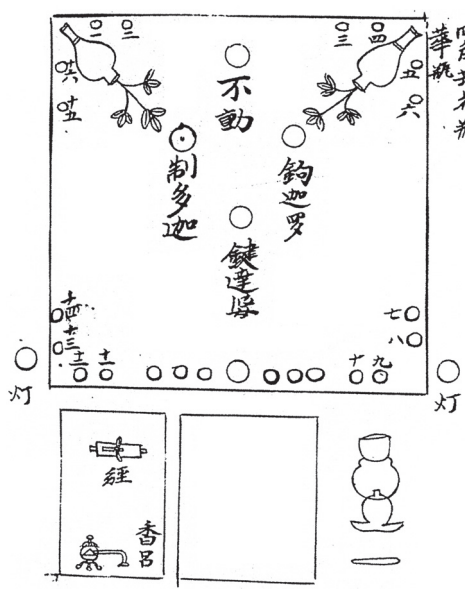
次百八結（慈救呪これを誦す 一結一遍）

（裡書に云わく。一鬼の名号を唱えて一結す。次第に十五これを結す。鬼神を繫縛せしめ悪心を止る義なり）

供物の図

供物圖

四角共花瓶
華瓶



訓下・加註 作法集伝授要意 元瑜編（5）

（裏書に云わく。若しくは洗米これを用う。如法には五穀の堅めの粥なり。四角に十六杯なり。十五鬼と一つは眷屈となり）

佛供二十杯

四角に各四杯（十五杯は十五鬼神 今一杯は惣じて眷屈の料なり）

供物等生児の生氣 養者の方にこれを埋む^云但し天一帝白の方を避くべし。

童子經書写供養支度（元海僧都の支度なり）

合

薄様一枚 五色系 一条（長八尺） 墨一挺 筆一管 名香少々 蘇蜜少々 燈油二合 佛供米五舁 五穀少々 各
五合（稻穀、大小豆 菉豆 胡麻） 土器（大五口 小二十口） 桶二口（杓二枝） 折敷（二枚） 薦（一枚） 半畳（一
枚） 浄衣一領（白衣）

右注進如件

季 月 日

〔伝授要意〕

童子經書写供養略作法

此の次第は『薄双紙』の通りなり。經の料紙は薄様、金尺一寸八分許り。此れ經の長けなり。書了つてこれを

巻き、而して封目の上下に永字、筒の中に経と結線とを入れ、筒の上はネリクリにてこれを結ぶ。其の図別にあり。
委細口授、諸尊法の時の如し。

唱南無梅檀乾闥婆王 百反

金掌七反 八反目より念珠にて数を記す。

以云拓明二十一反等 墨を取り独古の如くこれを持す。

先十五結 十五鬼神 一結ミミ十五鬼の名を一人宛呼なり。

註1 『薄双紙』 同書初重卷第三に出す二法の最初の法。(正蔵78六三〇c)

〔作法集〕

壽延経護事 四十三

内題 寿延経の事

右件の経は、梵釈寺の経蔵にこれあり。東南院の権大僧都有慶六十余にて死すべしの夢想これあり。仍て東安寺の別當潮深僧都をもつて明寛座主に延寿の護を申し請ふ。明寛寿延経を書しこれを送る。有慶七十六迄これを持す。賢覚法眼六十余にて此の護を書き持しての後寿七十七と云

仁平三年十月の比、賢覚法眼此の護を書いて、式部の少輔範兼をもつて鳥羽院に進める。甚だ御感有り云。同十一月五日専使を差し仰せられて云く、御夢想あり、此の護の靈驗掲焉なり。尤も感し思食すと云

特 別 寄 稿

寿延經書写供養作法

書写の間名香を焼いて断ぜず。延命をもって本尊となしてこれを供養す。佛供は本尊に二杯、十七神各一杯、五穀の粥十七杯 菓子十七杯 密宗の供養の作法の如く延命の法これを修す

十七神印明（印は金剛合掌 明は經の如く²これを加う）

經の中に延命の像 若しくは畫き、若しくは種子を籠めて堅く卷いて、黄色の糸をもって十七神の名を唱え、十七結（一遍一結）

次に延命の真言をもって百八結（一反一結）此の結線をもって經を封じて持たしめるなり。作法大略『童子經』の如し。

〔伝授要意〕

¹ 寿延經の事

慈順の仰せに云わく。寿延とは如何。当に延寿と云うべし。元²按ずるに次の經題も寿延經と云う。又『秘録』上（三十六右）『寿延經』一卷と。（梵釈）爾して疑うべからざるものや。

凡そ十五歳までは『童子經』の護を与えて十六歳已上はこの『寿延經』の護を与えるなり。護りの認め様は『童子經』の如し云。

² 梵釈寺 『拾芥抄』下本（十一右）に云わく、梵釈寺は、近江国志賀郡。延暦年正これを建立。同十一年近江国水

田百町勅して施入^{已上} 『元亨釈書』十六永忠の伝に云わく、桓武帝勅して梵釈寺に主とせしむ。忠师宝龜初めて入唐延

曆の年帰朝。彼の師請來の聖教なること知ぬべし。

〔東南院〕 南都東大寺に在り。『大和志』第二(十二左)に云わく、東南院は則ち僧正聖宝建つ^上

〔有慶〕 潮深 明寛 伝未だ考えず。

³ 賢覚 醍醐理性院元祖

註1 この法は、前の童子経が小兒対症の法であるのに対し、十五歳以上の大人の身体を護るを目的としている。

註2 梵釈寺 桓武天皇が延暦五年(七八六)に建立。僧尼の修行を重視しての寺院。鎌倉末に廃絶。(日本歴史事典より)

註3 賢覚 一〇八〇—一一五六 醍醐寺理性院開基。

〔作法集〕

寿延経 四十四

内題 佛説寿延経

佛、香華園に在す時大比丘比丘尼、優婆塞優婆夷七萬二千人と俱き比丘あり難達と名づく。寿を終盡せんと欲す。佛に従つて寿命を延さんことを求む。十七神名を説き玉う。黄縷百枚を結んで即ち十八年を延ぶ。其れ寿を有^{タモ}つて百歳なる者は、命を延ぶること二十歳にして安穩を得て諸の悪害を離る。病者は愈ゆることを得、啞^{モノイ}者は言うことを得、四百四病時に応じて消除す。佛の言さく、諸の有病の者、此の十七神名を持して篤く結縷する者は衆患悉く除く。常にまさに此の経を持して清淨の処に著すべし。若し身に隨えてこれを離すこと得ずんば、便ち其の人をして無

特 別 寄 稿

量の福を獲せしむ。

悉^{シシヤ}薩^バ和^{ビク}比^ク丘^{シヤ}遮^バ和^{ズイ}隨^{シヤ}沙^モ門^ン
 訶^カ頭^ツ 摩^マ由^ユ羅^ラ 阿^ア訶^カ摩^マ迦^カ遮^{シヤ}
 遮^{シヤ}神^ン 十^{ジウ}七^{シチ}神^ン 常^{ジョウ}に當^{タウ}に擁^{ユウ}護^ゴして便^{ベン}ち所^{ショ}願^{ガン}即^{ツキ}ち得^{トク}ることを得^{トク}ん。

佛說壽延經

梵釈寺經藏に此の經あり

〔伝授要意〕

¹ 壽延經

〔四百四病〕

『五王經』に云わく、一大不調百一病生 四大不調 四百四病同時に共に作す。『僧祇律』十一(二十一左)に、風病百一あり。火病に百一あり。水病に百一あり 雜病に百一あり。

〔十七神〕

私に按ずるに、悉薩知等の梵名、これ十七神の名字と見たり。

註1 壽延經 密教大辞典には「和製の偽經」と断じている。